

平成 25 年度

## 中村湿原動植物生息調査報告書

中村湿原の植物相と昆虫、特にトンボ相について

大類貞夫

2014/01/30

# 平成 25 年度 中村湿原動植物生息調査報告書

## 中村湿原の植物相と昆虫，特にトンボ相について

調査者 大類貞夫

### はじめに

昭和 50 年から行われた山形県総合学術調査会「神室山・加無山」の調査の際，加無山系の山麓部の一部ということで中村湿原の存在を知り，調査範囲に加えた。その後，平成 9 年に刊行された真室川町史の編集・執筆委員の委嘱を受け，何度かの調査を行った。そしてこの度，真室川町教育委員会の依頼で再調査の話があり，中村湿原の植物や昆虫などの全容がほぼ分かっているのに何故，という疑問もあったが，今回の調査を行ってみて，その意義の有用性を改めて確認することができた。調査の機会を与えて頂いた町教育委員会に謝意を表したい。

中村集落の東部にある中村湿原と更にその東方にある嘉平谷地とに分けて記述する。共にイボミズゴケとハリミズゴケを主とする湿原に，ヨシを最優先する高茎草本が繁茂し，下層に生えるサギソウをはじめとする貴重植物の保全を如何にするかが大きな問題であった。

筆者が神室少年自然の家に勤務していた昭和 60 年～61 年頃，地元の方々に湿原を守りたいという気運があったようで，ヨシを如何にしたらと相談を受けたことがあった。そこで一般の湿原植物が出揃う前の 5 月中下旬頃，ヨシが伸長し始める頃に刈るのが良いのではという意見を申し上げた。その頃，中村湿原を守る会（初代会長沓澤靖夫氏）が結成されたようで，湿原の周囲に堀割を造ったり，柵や木道が設置されたりして現在に至っている。守る会会員，地区民の熱心な保全活動により，当初よりサワランやサギソウなどが見事に復活してきている。

中村湿原のヨシは毎年，嘉平谷地は今年 20 数年ぶりで刈ったとのこと。その結果と考えられるのが，特に中村湿原のサワランとトキソウが見事に増殖し，嘉平谷地はヨシが密生し，立ち入ることすらできなかったが，今回の調査では中村湿原以上に多くの株数のサギソウを見ることが出来た。

両湿原共にハッチョウトンボが発生している。以前に比し増減に変化がないようである。これもミズゴケ湿原内に小池塘を造るよう勧めたことがあったが，好結果を得ているのは確かであろう。

## 1. 地形・地質の概観

付近一帯は新第三紀中新世の野口層といわれている地層である。繋沼北側道路脇に露出している地層はもろい砂岩からなり、巻貝・二枚貝などの海産貝類を産出する。およそ 400 万年前に海底に堆積した地層で、当時山形県北部は浅い海底であったことを物語っている。周辺の低山一帯は砂岩が風化し、赤色土化した粘土で表層が覆われている。

東内山地内には繋沼をはじめ、曲谷沼等のいくつかの天然湖沼や通称嘉平谷地などの凹地に生じた湿原がある。国立防災科学技術センター発行、地すべり地形分布図（大沢 5 万分の 1）の航空写真の解析によれば、これらの湖沼や凹部は地すべりにより生じたものという。中村湿原の湿地、嘉平谷地の湿原は、沼沢地であった所が、周囲から挺水植物の繁茂、堆積から低層湿原へ、さらに高層湿原へ移行する途中の中間湿原と考えられる。

以前、湿原からスギの埋もれ木を企業として採掘したことがあるとのことで、真室川中学校造成のときに掘り出されたスギの巨株の例からも判断できるように、付近一帯は現在の戸沢村古口峡谷地帯や真室川町雄勝峠付近にみられるようなスギ林で覆われていたものと推定される。このように湿原から埋もれ木が産出することも考え合わせて、地すべりによる土砂の滑落により谷が埋没し、湖沼や凹地が生じたものと考えられる。

しかし繋沼東南東方向にある大谷地沼は、明治 10 年 7 月～10 月に地盤の陥没により生じたといわれており（矢の沢地区地殻の大変動、『真室川町史』より）、繋沼・摺鉢沼・才樋沼と西北西から東南東にかけて、一直線に並ぶ延長上にある沼であることから、地盤の構造上に共通項があるようで、一連の湖沼と凹地は地すべりと陥没とにより生じたと考える。

繋沼と二つの摺鉢沼は通年水を湛えているが、才樋沼は夏期には干し上がり、沼底部にカヤツリグサ科の一種であるマツバイが生じる。この沼の底部は透水性のある土質・岩質からなると考えられる。沼地が湿原に遷移していく途中にあるところとして、今後の変遷の経過に興味がある。摺鉢沼の一つは冬期でも凍らないといわれており、沼底に湧水があるものと考えられる。

## 2. 調査記録

平成 25 年の調査は下記の通りである。主な知見なども記している。

被度調査（1 m <sup>2</sup> の正方形区内で行った）							
76%～	5,	51～75%	4,	26～50%	3,	6～25%	2
1～5%	1,	1%未満	+				

### (1) 6月25日（町教委・町文化財委と合同）サワラン・トキソウの増殖を知る

サワラン 200 株以上、トキソウ 1,000 株以上、他ハッチョウトンボ・クロスジギンヤンマ・ハラビロトンボ・ヨツボシトンボなどを確認。

#### ・方形区内調査Ⅰ（中村湿原内サワラン群生地）サワラン 47 株

イボミズゴケ 5, ヤチカワズスゲ 3, サワラン 2, コバギボウシ 2,  
レンゲツツジ 1, モウセンゴケ 1, トキソウ +, ヨシ +

#### ・方形区内調査Ⅱ（中村湿原内トキソウ群生地）トキソウ 45 株

イボミズゴケ 5, トキソウ 2, ヨシ 2, ミタケスゲ 2,  
ミズオトギリ 2, ノハナショウブ 1

・方形区内調査Ⅲ（嘉平谷地内）サワラン 10 株

イボミズゴケ 5, ヨシ 4, ヒメシダ 2, ミツガシワ 2, コシロネ 1,  
ノハナショウブ 1, サギスゲ 1, ミズオトギリ 1, サワラン 1,  
モウセンゴケ +

他, 湿原内で発見出来た種（上記種以外）

中村湿原 イヌタヌキモ・ヒツジグサ・ミツガシワ・ミズオトギリ・オヒルムシロ・  
エゾシロネ・カキツバタ（栽・逸出）・ノリウツギ・ヤマドリゼンマイ・

オゼイトトンボ・モノサシトンボ・オオコオイムシ・メダカ幼生

嘉平谷地 ヤマドリゼンマイ・ノリウツギ・ウメバチソウ・コオニユリ・ハリスゲ・  
サワラン・ハッコウトンボ

(2) 6月26日（単独・6月25日確認種以外）

中村湿原 オオニガナ・アメリカセンダングサ（外来種, 繁殖力旺盛除去必要）・ゴウソ

嘉平谷地 トキソウ 300 株以上・サワラン 10 株・ノハナショウブ 40 株以上

(3) 7月13日（中村湿原観察会）サワラン盗掘された跡あり, 開花1株のみ

トキソウまだ咲いていた。ノハナショウブ開花株 20 位終わりかけ, モウセンゴケはまだつぼみ,  
コオニユリは開花前, 新たな発見はオモダカ

(4) 7月25日（単独）

中村湿原 コオニユリ開花株約 50・アゼスゲ・エゾシロネ・カキツバタ結実・イシミカワ・  
ヒメシダ・コシロネ・サワラン結実・コバギボウシ咲き始め・ゴウソ・キイトトンボ・メダ  
カ成魚・周囲でヒグラシが盛んに鳴いていた。

嘉平谷地 ヨシがきれいに刈られていた。コオニユリ 10 株位・ヒメシダ被度 4（全体の）

(5) 8月4日（単独）

中村湿原 ウメバチソウ未開花・ミソハギ・ミズゴケ盗掘跡あり・クロイトトンボ

嘉平谷地 シロバナカモメヅル・ノリウツギ大群落・アオイトトンボ・ノシメトンボ・クロ  
ヒカゲ

(6) 8月22日（町教委・町文化財委と合同）

中村湿原 サギソウ開花株 32 を確認

アギナシ 10 株位・ホタルイ・モウセンゴケ結実期・コオニユリ結実期・アマゴイルリトンボ・  
オニヤンマ・コガネグモ

嘉平谷地 サギソウ 50 株以上開花・ハッコウトンボ 1 頭のみ発見

周囲の山林でツクツクボウシの鳴き声を聴く

(7) 8月26日（単独）

中村湿原 ハッコウトンボの姿無し・イヌタヌキモ開花株 3

サギソウ開花株 13, 足踏み盗掘跡あり・エゾイトトンボ・コノシメトンボ

周囲の山林でヒグラシ・ミンミンゼミ・アブラゼミの鳴き声を聴く

嘉平谷地

1 m<sup>2</sup>の方形区内調査（被度）

イボミズゴケ 5, ミズオトギリ 2, ヤチカワズスゲ 2,

サギソウ 1, ヨシ 1, ヒメシダ 1, ミツガシワ +

### (8) 9月17日(単独)

中村湿原 ウメバチソウ咲き初め・コバギボウシ結実・サギソウ開花1株のみ・ミズオトギリ紅葉・アキノウナギツカミ・オオルリボシヤンマ産卵・ミドリヒョウモン・トノサマガエル  
嘉平谷地 サギソウ1株開花・ウメバチソウ300株以上・アカバナ20株位  
メスグロヒョウモン

### (9) 10月8日(町教委・町文化財委と合同)

中村湿原 ウメバチソウ盛り300株以上・オオニガナ開花10株・ミドリヒョウモン・メスグロヒョウモン・ミズスマシ

別記しているが、昭和51年に中村湿原で多数目撃されたマダラナニワトンボに期待したが、晴天にもかかわらず発見出来なかった。

嘉平谷地 ウメバチソウ開花株1000以上  
オオカサスゲ・ヤチスギラン(写真2)

(同湿地で再度発見した種は重複を避けた)

## 3. 植物相

### (1) 湿原・繋沼周辺部の植物相

冷温帯低山地特有のコナラ・クリを主とする二次林である。

高木層 —— コナラ・クリ・ハウノキ・ミズナラ

亜高木層 —— コナラ・クリ・ヌルデ

低木層 —— タニウツギ・ハナヒリノキ・ウツギ・ノリウツギ・ノイバラ

草本層 —— チマキザサ・ワラビ・チゴユリ・ミツバツチグリ

雑木林周辺部の袖植物群、マント植物群等——

クズ・カナムグラ・オニドコロ・ノブドウ・ウド・ヤマユリ・エビネ・  
ダキバヒメアザミ・ウチワドコロ・ヤマノイモ・ススキ・ミソハギ・  
シロバナカモメヅル・オミナエシ・オトコエシ・ミヤマアブラススキ・  
ケネバリタデ・ゲンノショウコ・ツルマメ・イシミカワ・ヌカキビ・  
ノコンギク

### (2) 湿原内の植物相

イボミズゴケ・ハリミズゴケを主とする湿原で、底部に厚い泥炭層を伴っている。泥炭はミズゴケなどの湿性植物が炭化したものである。

湿原内には次のような湿性植物がみられる。イボミズゴケ・ハリミズゴケ・ヤマドリゼンマイ・ミツガシワ・サワオグルマ・エゾリンドウ・コバギボウシ・ミズバショウ・コオニユリ・ドクゼリ・ノハナショウブ・トキソウ・サワラン・コシロネ・ヨシ・ウメバチソウ・サギソウ・ヤチカワズスゲ・ミズオトギリ・イヌタデ・オオイヌノハナヒゲ・エゾノサヤヌカグサ・ミタケスゲ・モウセンゴケ・ホタルイ・ミズチドリ・レンゲツツジ・サギスゲ

以上が町史執筆時の調査で知り得た植物であるが、中村湿原内でこの中のうち、今回の調査で発見出来なかった種は次の通りである。採取やヨシ伐採の際失われたのかも知れない。幸いなことに絶滅危惧種は1種だけである。

サワオグルマ (各地の湿地や水田地帯に多い), イヌタデ (各地に極普通 古名アカマンマ), オオイヌノハナヒゲ (各地の湿地で見られる), エゾノサヤヌカグサ (イネ科の一種), ミズチドリ (別記しているが今後再発見される可能性大)

#### 4. これまで両湿原内で確認出来た種

表1 絶滅危惧階級 (県レベル) (国レベル)

CR: 絶滅危惧 I A 類	ごく近い将来における絶滅の危険性が極めて高いもの。
EN: 絶滅危惧 I B 類	IA 類程ではないが, 近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高いもの。
VU: 絶滅危惧 II 類	絶滅の危険が増大している種。
NT: 準絶滅危惧種	存続基盤が脆弱な種。
DD: 情報不足	評価するだけの情報が不足している種。生息地が局限されており, 生息密度が低く希少である種。

#### シダ植物

- ヒカゲノカズラ科: ヤチスギラン (NT) (一) (写真 2),
- ゼンマイ科: ヤマドリゼンマイ (写真 1)
- オシダ科: ヒメシダ

#### 種子植物

- タデ科: イヌタデ・アキノウナギツカミ・イシミカワ
- スイレン科: ヒツジグサ (写真 5)
- オトギリソウ科: ミズオトギリ (写真 16)
- モウセンゴケ科: モウセンゴケ
- ユキノシタ科: ノリウツギ・ウメバチソウ (写真 18)
- ミソハギ科: ミソハギ (写真 14)
- アカバナ科: アカバナ
- アリノトウグサ科: フサモ
- セリ科: ドクゼリ (写真 23)
- ツツジ科: レンゲツツジ
- リンドウ科: エゾリンドウ (写真 17)
- ミツガシワ科: ミツガシワ
- ガガイモ科: シロバナカモメヅル
- シソ科: コシロネ・エゾシロネ
- タヌキモ科: イヌタヌキモ (写真 6)
- キク科: サワオグルマ・オオニガナ (写真 15)・アメリカセンダングサ (帰化)
- オモダカ科: オモダカ (写真 4), アギナシ
- ヒルムシロ科: オヒルムシロ
- ユリ科: コオニユリ (写真 11)・コバギボウシ (写真 12)

- アヤメ科 : ノハナショウブ (写真9)・カキツバタ (栽)
- イネ科 : エゾノサヤヌカグサ・ヨシ
- サトイモ科 : ミズバショウ
- カヤツリグサ科 : ゴウソ・ヤチカワズスゲ (写真20)・サギスゲ (VU) (一) (写真21)・  
オオイヌノハナヒゲ・ミタケスゲ (写真13)・ハリスゲ・オオカサスゲ
- ラン科 : サワラン (EN) (一) (写真7)・サギソウ (CR) (NT) (写真19)・  
ミズチドリ (VU) (一) (写真10)

#### コケ類, 蘚類

- ミズゴケ科 : イボミズゴケ・ハリミズゴケ

#### トンボ類

- イトトンボ科 : キイトトンボ (写真29)・クロイトトンボ・エゾイトトンボ・  
オゼイトトンボ (写真30)
- モノサシトンボ科 : アマゴイルリトンボ・モノサシトンボ
- アオイトトンボ科 : アオイトトンボ
- オニヤンマ科 : オニヤンマ
- ヤンマ科 : ミルンヤンマ・オオルリボシヤンマ・クロスジギンヤンマ
- エゾトンボ科 : カラカネトンボ・コヤマトンボ
- トンボ科 : シオカラトンボ・ヨツボシトンボ・ハッチョウトンボ・ノシメトンボ・  
ハラビロトンボ・アキアカネ・リスアカネ・マダラナニワトンボ・  
コノシメトンボ

### 5. 分類・分布上注目すべき植物・トンボ

#### (1) サギソウ (CR) (NT) ラン科

以前は各地の湿原に数多く見ることが出来たが、開田や畑地造成、園芸採取等で県下では殆ど絶滅に近い状態である。町内では野々村溜池に隣接する神ヶ沢湿原には立ち入るのがはばかれる程の大群落があり、近くの田の畔にも生えていたランである。それが昭和40年前後の開田ブームのあおりで全滅したのが惜まれる。平成25年8月22日の調査では、中村湿原で32株、嘉平谷地では50株以上の開花株を数えることが出来た。最上地方で、他では大蔵村沼の台に僅かに残っている程度である。

#### (2) サワラン (EN) (一) ラン科

サギソウに次いで盗採されているランである。紅紫色の美花で愛好者が多く、6月25日の調査の際は、中村湿原では約200株、嘉平谷地で10株の開花株を見ることが出来た。ところが、中村湿原の7月13日の観察会の際は、開花株は1株だけで、結実しつつある株を多数見受けられたが、明らかな踏み込み跡があり、盗掘されていた。町内では、女甕山の荒沼湿原にもあり、県内最大の群落があったが、県外からの集団での盗採があったとのことで、ここでも数を減じてきている。ここにも木道が設置され観察しやすくなったが、採取は厳禁とされている。

#### (3) トキソウ (VU) (NT) (写真7) ラン科

6月～7月頃湿原に咲くトキ色のランである。平成21年6月の調査の際は100株程度であったが、6月25日の調査の際は、中村湿原では1,000株以上の開花株を見ることが出来た。著し

い増加で県内最大の群落である。嘉平谷地でも 300 株以上を確認できた。ヨシ刈りの継続や盗掘防止などの策をとれば、サギソウ・サワランと共に更に殖えるものと考えられる。

#### (4) サギスゲ (VU) (一) カヤツリグサ科

北海道・本州及び広く北半球の湿地に生える寒地系の種である。5～6 月頃咲く花は目立たないが、6～8 月に熟し 1 株に 2～5 個つく白い小穂から良く目立つようになる。白い小穂から鷺の名がついた。中村湿原、嘉平谷地共に 100 株以上を確認できた。亜高山の湿原に生えるワタスゲ同様、寒地系のスゲでありながら、低地の湿原にも生える。最上では、他では新庄・金山・最上・鮭川・大蔵の各市町村で分布を確認している。

#### (5) ミズチドリ (VU) (一) ラン科

6～7 月頃、山間の湿地に咲くランで、花は芳香を出すので、ジャコウチドリの名がある。真室川町史執筆の為の調査の際、中村湿原内で確実に自生を確かめていたが、今回の調査では発見できなかった。しかし、種子が散布されていると考えられ、今後復活する可能性はあると思う。繋沼付近の私有地の小湿地では、ヨシの間にミズチドリが生育している。

#### (6) ミツガシワ (一) (一) (写真 3) ミツガシワ科

北海道・本州・九州に分布し、千島や樺太、その他北半球に広く分布する周北極植物で、全く同じミツガシワをノルウェーで見て感激した思い出がある。低地では 4～5 月、高地では 7～8 月に咲く低地の残存植物として、各地の湿地で見ることができる。絶滅危惧種ではないが、注目に値する植物の一つと考えて良い。

#### (7) ハッチョウトンボ (NT) (一) (写真 25, 26, 27) トンボ科

1 円アルミ貨に重ねると羽は少しはみ出るが、頭部から尾端まで収まる程の体長 20 mm 位の日本最小のトンボで、成熟するとオスは真紅になり美しい。飛んでいる様は一見アブのようで、オスは小さなテリトリーを作り、小さな範囲を可愛い姿で飛び回る。しかし、移動距離は意外と長いようで、町内鏡沢地区から直線距離約 7 km 離れた女甕山荒沼湿原で平成 8 年の 1 年だけ見られたことがあったが、どこから移動してきたかは不明である。最上地方では各地の湿原に発生しているが、時に休耕田に発生する事はあるが、このような所では持続性はない。

#### (8) マダラナニワトンボ (VU) (CR) トンボ科

アカネ属の所謂アカトンボの一種であるが、ナツアカネのように赤くならず、殆ど真っ黒なトンボである。低地の湿原に発生し、その後近辺の林梢に移動し、10 月になると発生地に戻ってくるといわれている。

昭和 51 年 10 月 7 日の観察の際は、中村湿原で 10 数頭を目撃し、内 2 頭を採取したが、その後記録していない。県下では最近著しく数が減っている種で、農薬が入り込む事の無い湿地が発生地なのに減少の原因は不明である。平成 25 年 10 月 8 日に調査したが全く発見できなかった。絶滅したどうかは不明であるが今後の調査に待ちたい

#### (9) ミルンヤンマ (一) (一) ヤンマ科

腹長 47～68mm くらいの黒地に黄色い斑紋のある中型のヤンマ。日本特産種で北海道南部・本州・四国・九州および周辺の離島に生息する。北海道・本州ではまれな種で、普通は山間の森林に囲まれた陰湿な溪流に生息するものであるが、中村のような湿原で生息を確認できたのは珍しい。湿原上 2 m 前後の高さの所をパトロール飛行しているものを採集し、本種であることを確認した。



#### (10) カラカネトンボ(一) (一) トンボ科

平成元年6月3日に嘉平沼付近を飛び交う多数の本種を発見した。北方系の種で本州中部以北、北海道に分布。国外ではサハリン(樺太)・朝鮮半島北部・中国東北部・東シベリアに産し、亜種名は *amurensis* (アムールエンシス, アムール地方の意) シベリアのアムールが原産地である。県内では一般に高地帯に発見されるが、最上地方では戸沢村今神お池(海拔400m)、新庄市畑(60m)などの低地、低山地に生息している。中村湿原も同様に海拔160mの低地である。腹長31~35mm, 全身が唐金色をした精やかな感じのやや小型のトンボである。

#### (11) アマゴイルリトンボ (NT) (一) (写真28) モノサシトンボ科

本州のみに分布する日本特産種で、山形県、新潟県、福島県だけで記録されている希種である。本県では西川町志津で最初に発見された。筆者は平成7年7月に大蔵村沼の台で発見していたが、同8年6月に中村湿原で本種を確認した。他に置賜地方でも生息しているとの情報がある。中村湿原での発生は北限の産地として貴重である。腹長が30~32mm, 雄は成熟すると地色が美しいルリ色になる美麗種である。

### 6. 中村湿原周辺で確認された貴重な植物・昆虫

#### (1) キンラン (CR) (VU) (写真24) ラン科

本州~九州, 国外では朝鮮・中国に分布する。山地・丘陵地の疎林下に生える。いずれの地でも希種に属し, 県内では各地で確認されているが, 群生することはない, 発見されても1~数株という状況である。最上地方では新庄市・舟形町・鮭川村で分布を確認されただけであったが, この度繫沼付近の私有地で発見されていた。所有者に大切に保護されているもので, 僅か4株だけであったが, 産地を明記せず, そっとして見守って行きたい植物である。

#### (2) オミナエシ (VU) (一) オミナエシ科

以前から, 初秋を彩る花, キキョウやミソハギなどと共に盆花として親しまれてきた花で, 疎林内や向陽草地など至る所に見られた植物である。最近, 各地で姿を消しつつある花であるが, この度の調査で, 嘉平谷地の周囲で数株発見されたものである。町内の各地で産地が発見されているが, いずれの地でも数は少なく, 大切に保護して行きたい, 絶滅危惧種の植物である。

#### (3) ツマグロヒョウモン (一) (一) (写真22) タテハチョウ科

熱帯・亜熱帯系のヒョウモンチョウ類の一種である。国外では朝鮮・台湾からインド・オーストラリアと広く分布する種で, 国内では近畿地方以南に普通で, 東京近辺でも普通に見られることから, 定着しているものと考えられる。以北では北海道でも記録があるが, 偶産種と思われる。県内では最近庄内地方の各地で発見されている。写真のチョウは平成17年8月9日, 中村集落の民家の庭, オオアワダチソウに訪花したものを採集した♀で, 最上地方では初の記録である。幼虫食草はスマレ属各種で, このチョウは羽化間もない新鮮な個体で, おそらく, 暖地から移入されたパンジー(スマレ科)に付いて来た卵か幼虫から成虫になったものと考えられる。

#### (4) ツクツクボウシ (DD) (一) セミ科

セミの一種で, 早い年で7月下旬から通常8~9月頃に鳴き声を聴くことがある。8月22日の調査の際, 嘉平谷地北方での鳴き声で生息を確かめたものである。県下でも稀な種のように,

産地は極めて局所的であるが、分布状態がまだ把握されていない種である。最上地方では最上町の各地で発生しているが、町内では釜淵の旧林業試験場跡地で多発しているが他では極めて稀である。筆者は町内の他では小又集落と日正鉦山跡付近、新庄市最上公園、金山町金山、戸沢村古口、津谷で各1度鳴き声を確かめただけである。中村地区では初の記録である。オーシートクツク……と感じ取られる特徴のある鳴き声で鳴くので更に発生地が発見されると思われる。

## おわりに

先ず、毎年定期的にヨシ刈りを行ない、湿原の保全に当たられている中村湿原を守る会会員、地区民の皆様には謝意を表します。特にトキソウ・サワランの増殖は目を疑う程でした。特に嘉平谷地は、これまでヨシが密生しており、立ち入る事が出来ないような状態でしたが、一度のヨシ刈りでサギソウの復活は嬉しい限りです。大変な困難を伴いますが、中村湿原の東側に隣接するヨシ原を刈り採って見たら、どんな植物が現れてくるだろうかなどと考えたりしています。しかし、夏・秋になってからのヨシ刈りは中止したほうが良いと思います。理由は踏み付けによるミズゴケ、ラン等への影響が充分考えられます。夏・秋に刈っても翌年の成長に必要な養分を地下部に蓄えてしまっているため刈り取る意義がありません。刈り取ったヨシを湿原外で処理しているようですが、普通の草地への遷移を防ぐ意味でも大変良好な方法です。湿原に何度か行ってみました。明らかにサワラン・サギソウの盗掘跡があり、今後どうなっていくのか、ミズゴケの掘り取った跡もあり、大切な湿原植物の保全が懸念されます。大石田町は全国的にも珍しいとされているギフチョウ・ヒメギフチョウの混棲地で、採集した場合は罰則付きの天然記念物に指定していると聞いています。ハッチョウトンボよりも遥かに貴重種とされているサギソウ・サワラン・トキソウなどの保護に力を注いで頂きたいと思っています。真室川町文化財（天然記念物）に指定し、両湿原の保全に当たって頂きたいと願って止みません。学術的にも非常に貴重な湿原である事を重ねて述べておきます。

平成 26 年 1 月 30 日 大類貞夫



写真1 ヤマドリゼンマイ



写真2 ヤチスギラン



写真3 ミツガシワ



写真4 オモダカ



写真5 ヒツジグザ



写真6 イヌタヌキモ



写真7 サワラン



写真8 トキソウ群落



写真9 ノハナショウブ



写真10 ミズチドリ



写真11 コオニユリ



写真12 コバギボウシ



写真 13 ミタケスゲ



写真 14 ミソハギ



写真 15 オオニガナ



写真 16 ミズオトギリ



写真 17 エゾリンドウ



写真 18 ウメバチソウ



写真 19 サギソウ



写真 20 サギソウ群落・ヤチカワズスゲ



写真 21 サギスゲ群落



写真 22 ツマグロヒヨウモン♀



写真 23 ドクゼリ



写真 24 キンラン



写真 25 ハッチョウトンボ♂



写真 26 ハッチョウトンボ♀



写真 27 モウセンゴケに捉えられた  
ハッチョウトンボ



写真 28 アマゴイルリトンボ♂



写真 29 キイトンボ♀



写真 30 オゼイトンボ♂